売薬の意匠あれこれ 〈その33〉小型看板 ― その3

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長　平井 有（ひらい・たもつ）

「売薬の意匠あれこれ」では2回続けて看板を紹介しました。〈その31〉では店内に飾られた昔の売薬の小型看板を、また前号〈その32〉では主に医薬分業が時代の潮流となる以前の、薬局が調剤を行う場所であることをアピールする看板を紹介しました。

今回は小型看板の中でも江戸時代からあった看板の一分野である「造形看板」を紹介します。「造形看板」とは商品を文字ではなく商品の形、造形で表した看板で、江戸時代ですとろうそくの形をしたろうそく屋の、げたの形をしたげた屋の、筆の形をした筆屋の看板などがありました。ここでは比較的小型の「造形看板」を取り上げてみました。

①

②

①「六神丸（ろくしんがん）」の看板

中国発祥の牛黄、麝香（ジャコウ）、蟾酥（センソ）などの動物性生薬を多用した強心、気付け薬の「六神丸」は成分的にも「救心」と同類に分類される、歴史的には「救心」の先祖ともいえる製剤です。

「六神」の意味は一つには陰陽五行説の東西南北の四神（青龍（東）・白虎（西）・朱雀（南）・玄武（北））に天・地の二神を加えて六神としたものか、あるいは陰陽五行説の五臓六腑の五臓に心包を加えた六臓をつかさどるそれぞれの神に効き目があるので「六神丸」と名付けたなどの説があります。

「○○六神丸」を名乗った配置薬をはじめとする「六神丸」製剤は、以前は100種類もあったようですが、この「脩虔（しゅうけん）六神丸」はだるまを看板のモチーフにしています。その長く伸びたひげや眉毛は長寿の象徴でもあり、横に転がしてもすぐに起き上がることから、「ねてもすぐにおきる」と文字が刻んであります（病に臥せってもすぐに治って起きるとして、売薬の世界では「だるま」はよく用いられたモチーフでした）。

②「藤澤樟脳」の看板

昭和5年（1930）に設立、大阪・道修町に本社のあった藤沢薬品工業株式会社は、平成17年（2005）には山之内製薬株式会社と合併してアステラス製薬となりましたが、その大本は初代藤澤友吉が明治27年（1894）に大阪で藤澤商店を創業したことに始まります。

藤澤商店の看板商品は、家庭では主に衣服の虫よけに使われるクスノキから抽出される樟脳（カンフル・カンファー）でした（その他鎮痒作用や清涼感などがあることからかゆみ止め、湿布薬などにも配合されます）。

その「藤澤樟脳」の看板キャラクターは、その図像を飾ることで疫病よけや魔よけの効果があるとされた鍾馗（しょうき）様でした。看板の台には「世界唯一の防虫剤」と書かれています。

③「扇谷膏（おおぎやこう）」の看板

現代では軟膏剤の容器には軟膏ツボやチューブ容器が使われていますが、それ以前は特にハマグリなどの二枚貝の貝殻が軟膏の容器として普通に使われていました。

貝殻が軟膏の容器として多用されたのには次のような理由が考えられます。

- 二枚貝の殻はピッタリと合わさるため周りをろうで固めると中身を密封できる。
- 煮沸すれば消毒できる。
- 軟膏の成分による腐食の懸念がない。
- 安価で大量に手に入る。

この看板は一般に「一方膏」と呼ばれていた軟膏を「扇谷膏」と名づけて販売していた商品で、看板の形は富士山のようですが、実は軟膏の容器である貝殻をモチーフにしています。その効き目は「くさ 一切 たいどく のくすり」。「くさ」はかさ、できもの、ただれ、湿疹。「たいどく」は胎毒で、昔母胎内で受けた毒が原因でできたと考えられた乳幼児の頭部、顔面などの湿疹の俗称で、現代では脂漏性湿疹、膿痂疹など指します。

③

④「神丸（しんがん）」

金魚をモチーフにした「小児解熱専門薬 神丸」の看板です。明治10年（1877）に来日し東京帝国大学（現東京大学）で教授を務める傍ら日本の各地を探索し、東京の大森貝塚を発掘したエドワード・S・モースは、日本各地で古民具や看板、陶器などを収集。米国に帰国後、収集品を寄贈したマサチューセッツ州のピーボディー・エセックス博物館の館長を務めました。

その収集品目数は数万点に及びますが、その一つにこの金魚をモチーフにした「神丸」の看板があります。江戸時代、金魚を飼うことは大名や一部の富裕層のぜいたくな趣味でしたが、モースが来日する前の江戸後期になると、一般庶民の間でも金魚ブームが起き、養殖や品種改良が行われました。

そのような時代背景を持つ「神丸」の看板ですが、モースもこのデザインにひかれたのだと思われます。

④